

病 俣 水 補償交渉物別れ

チツソ 三千万円要求を拒否

水俣病の新認定患者の水俣市月湖、曹達人川本輝夫さん(50)ら十八人(熊本十六人、鹿児島二人)とチツソとの補償交渉が、一日午後三時半からチツソ水俣支社で行なわれた。席上、患者側から二人当たり三千万円の補償額を提示したが、会社側は中央公害審査会で解決したいという態度を変えず、物別れに終わった。患者側はこれを不満として、午後七時すぎからチツソ正門前で徹夜の抗議すわり込みにはいった。

交渉には患者家庭から十六人と、チツソ側から久我正一常務取締役、佐々木三郎同(水俣支社長)らが出席し、まず患者側が会社側の態度確認をした。これに対し久我取締役は「今回の認定は行

政的措置であり、会社には何にも知らされていないので、具体的に話を進めるための材料がない、したがって具体的に話が進められる場で早く円満に解決したい。同調してほしい」と中央公害審査委員会での解決方をたのんだ。

ンフレットで水俣病補償処理委一任派を取り上げている中で「補償額の多い人は三千万円以上になろう」との意味のことが述べてあることから患者側がヒントを得たものとみられるが、川本さんは「過去十数年間と今後の苦しみの代償として、市民にも会社にも知ってもらうために出た金額だ。それが根拠だ」と語った。

「たとえ十万円でも、認定の内容がわからないので、その金額をベースにした話し合いは出来ない」と答えて煮詰まらず、一時間ほど話し合いは終わった。

いったん患者側は引き揚けたが「会社が誠意を示すまで抗議のすわり込みをする」と正門前ですわり込みを始めた。

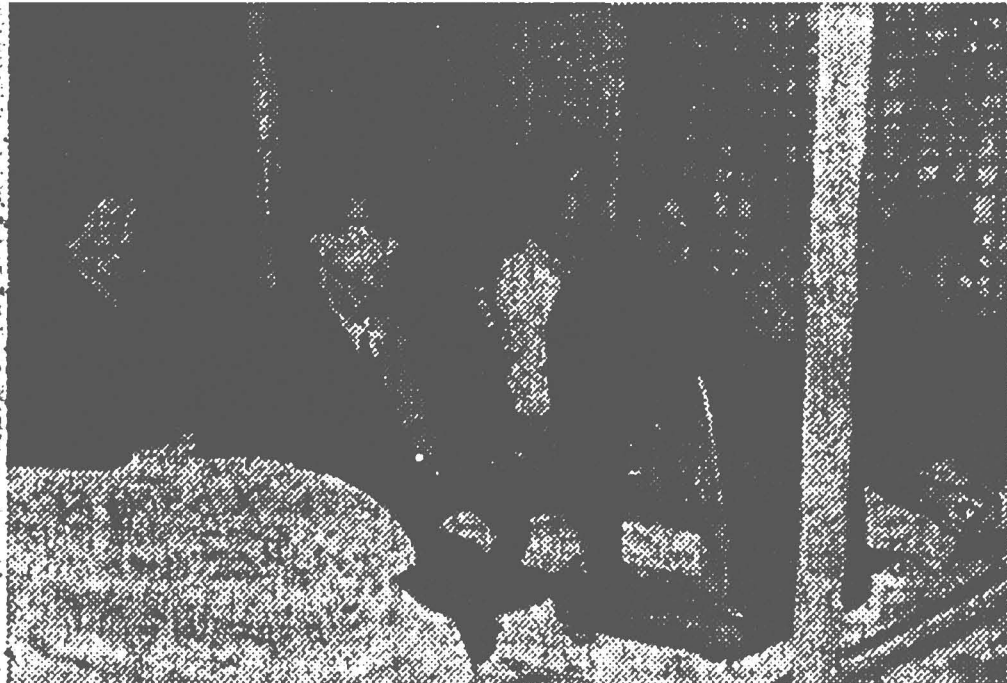
これに対し患者側は自主解決を主張し、一人当たり三千万円の補償額を示した。これは最近チツソが出した水俣病問題についてのパ

この案提示に対し、チツソ側は

ハNSTも決意

患者側、抗議の座り込み

会社側回答を迫る患者六人を含
む十六人は午後七時から支援団体
などが設置したテントの中に入っ



水俣チソ正門前にテントを張ってすわり込んだ患者家族。右
端はハNSTにはいった川本輝夫さん

た。このうちリーダー格の川本さ
んはハNSTを決意した。この日
の冷え込みはひどく、下には靴を
敷いて石油ストーブを持ち出して
暖を取っていたが、患者家族たち
は身震いしていた。

「われわれは誠意ある回答ある
まですわり込む。過去と将来にわ
たる患者の命と健康と暮らしとな
まごころの代償を患者に三千万円

ずつ今すぐ支払え」と書かれた書
板が、チソの正門を照らす電灯
でかすかに読みとれた。

補償問題をめぐって水俣病患者
が会社に抗議してすわり込んだ例
は、三十四年末の見舞い金契約時
と、四十三年の公害認定後の十二
月の補償交渉に次いで三度目。し
かしハNSTは初めてのケース。
なおハNSTに入った川本さん
は、水俣病を告発する会の人たち
が連れてきた医師の血圧測定など
を受けて午後七時からストにはい
った。